

―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

# 万葉の川心 第35回

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

鏡王女（天皇に）和へ奉れる歌一首（巻第二 九二番歌）

秋山の樹の下がくりゆく水の

吾こそ益さめ御念よりは

彼女の手紙を二度読み返し、封筒に戻した。窓の外の蝉時雨が一瞬で止まったようだった。いつもの原稿依頼、フロップディスクと写真。そして毎回添えられている手紙。もう当たり前となったその手紙を今日は特別なものとして受け取った。さしたることはない。「仕事を辞めて、新しい道へ進みます」とのこと。それは彼女にとって、とてもめでたい旅立ちだった。よかったと思う反面、もつこの手紙は読めないのだという淋しさが体を包んだ。肩から胸へ次第に足元へと澄んだ水が流れ落ちていくように。

決して感動的な文でも力強い励ましでもない。手紙はいつも時候のあいさつ、近況、そして私の健康を気遣う一言で閉じられている。ただ、美しかった。人となりがにじんで心をほつとさせる何かがそこにあった。いつもあったのに、失うとなってあらためて気づいたその「美しさ」に少しとまどっていた。そしてしばらく、お祝いの気持ちで伝えるためのペンも受話器も取れずにいた。

万葉集巻二には贈答歌が載せられている。鏡王女が宮廷の奉仕を終えて本郷へ退出するとき、挨拶歌として天智天皇から賜ったのが九一番歌である。「おまえの家も続けて見ていたのに。大和の大島の山に家もあればよいものを」鏡王女の家は近江にあるらしく、天皇のいる難波からは見えなかった。そして、それに応えて奉ったのがこの歌である。「秋山の木の下を隠れて流れいく水がそのかさを増すよつに」

あなた様のお思いよりは私の方こそ一層益してお慕い申し上げるでしょう。」美しい秋山の木々の下を、人知れず流れていく川の豊かな思いは、単なる愛情の比較を示しているのではない。十分に相手の思いを受け止めたうえで、想いの深さを歌っているのだ。写真の歌碑は、奈良県桜井市忍坂の舒明天皇押坂陵を過ぎた奥、鏡王女の墓へ続く道の脇にある。まさに樹木の下に隠れるように、流れるせせらぎを見つめるように優しく凛と建っている。鏡王女は後に藤原鎌足の正室となる。また、中大兄皇子の心を奪った額田王とは姉妹であるという説がある。いずれにせよ「歌の美しさ」は誰の心にも響き、虜にする「その人の美しさ」につながったことであろう。あの歌い手が、近年人々の心が病んでいるのは「美」をないがしろにしたからだと言っていた。今の世の私たちは、速く、楽に、簡単に、利潤だけを欲してきたのだろうか。もう一度「美しい」と感じる心を取り戻せるだろうか。幼い頃初めて見た川の大きさ、優雅さに心惹かれたあのとき

あなたと出会えて、一緒に仕事ができ本当によかった。そう思える人に出会えた自分を幸せに思う。あなたの美しさ、これから少しでも見習えたらと願っている。――今、去っていく後ろ姿に贈りたい。

